30周年　記念大会

子育て講演会

2013年（H25年）　6／8（土）久米小学校体育館

学校法人

徳山中央幼稚園

〔 演題 〕

憧れと生きる希望を育む子育て

Profile

汐見　稔幸　（しおみ　としゆき）

1947年　大阪府生れ

東京大学教育学部卒、同大学院博士課程修了。
東京大学大学院　教育学研究科教授を経て、
07年4月から白梅学園大学教授・副学長。
10月より学長。
現在　東京大学名誉教授　白梅学園大学学長

専門は教育学、教育人間学、育児学。育児学や保育学を 総合的な人間学と考えていて、ここに少しでも学問の光を注ぎたいと願っている。また教育学を出産、育児を含んだ人間形成の学として人間形成の学として位置づけたいと思っていて、その体系化を与えられた課題と考えている。三人の子どもの育児 に関わってきて、その体験から父親の育児参加を呼びか けている。
保育者たちと臨床育児・保育研究会を立ち上げ定例の研究会を続けている。
　また同会発行のユニークな保育雑誌『エデュカーレ』の責任編集者でもある。
　NHK、Eテレ　すくすく子育て　出演多数

〔 著 書 〕

『3～6歳 能力を伸ばす 個性を光らせる』2010年（主婦の友社）
『0～3歳 能力を育てる 好奇心を引き出す』2010年（主婦の友社）
『子どもが育つお母さんの言葉がけ』2010年（PHP研究所）
『保育者論』2010年（ミネルヴァ書房、共著）
『子どもの自尊感と家族』2009年（金子書房）
『子育てはキレない、あせらない』2009年（講談社文庫）
『夫婦力』2008年（岩崎書店）
『「格差社会」を乗り越える子どもの育て方』2008年（主婦の友社）
『子どもの学力の基本は好奇心です』2008年（旬報社）
『子どもの身体力の基本は遊びです』2008年（旬報社）
『子どものコミュニケーション力の基本は共感です』2007年（旬報社）
『乳児保育の基本』2007年（フレーベル館、共著）
『親だから伸ばせる中高生の「学力」と「生きる力」』2007年（主婦の友社）
『親子のハッピーコミュニケーション』2007年（岩崎書店）
『のびのび子育てこんなお母さんなら大丈夫
　　クレヨンしんちゃん親子学Ⅱ』2007年（双葉社）
『パパ権宣言』2006年（共著　大月書店）
『子育てにとても大切な27のヒントークレヨンしんちゃん親子学』2006年（双葉社）
『学力を伸ばす家庭のルール』2006年（小学館）
『子どものサインが読めますか』2005年（女子パウロ会）
『はじめて出会う　育児の百科』2003年（小学館）

プログラム

◎　開会の言葉
◎　園長挨拶
◎　来賓挨拶
◎　講師紹介
●　講　　演
◎　謝　　辞
◎　閉会の言葉

『 知識基盤･消費社会をどう生きるか 』

子育て講演会の意味するもの

2013,6,8　　**園長　御手洗賢成**

第1回目の1984年以来、本園の講演会は30年目を迎える。この間、子育てを取り巻く社会状況は、変化の激しい時代の波にさらされグローバル化と競争及び共生というかつて誰も経験したことのない地球時代を突き進んでいる。

この30年を振り返ると、象徴的な言葉が生まれては消え或いは再燃した。バブル崩壊･少子化･不良債権･経営破綻･温暖化･モラルハザード･新自由主義･携帯/ネット･年功序列型賃金、終身雇用制･ホームレス･ホリエモン･振り込め詐欺･ニート/フリーター･非正規雇用･派遣労働･格差社会･ネットカフェ難民･就活･道路特定財源･偽装･格差社会･教育格差･投機マネー･サブプライム･食糧自給率･後期高齢者･リーマンショック･消えた年金･断捨離･コンクリートから人へ･事業仕分け･婚活･妊活･終活･反日デモ･3、11･想定外･絆･復興予算･福島原発事故･官邸前デモ･TPP･再稼働･安全神話･ES細胞･遺伝子検査･IPS細胞･領有権･出生前診断･アベノミクス･改憲論。或いは、ファミコン･いじめ･登校拒否･ひきこもり･透明･心の闇･キレル･17歳･バーチャルリアリティー･学びからの逃走･普通の子ども･自殺･オヤジ狩り･DS･ポケモン･13歳のハローワーク･裏サイト･自己責任･ゆとり教育･学力低下･PISA･児童虐待･育児ストレス･気になる子･自尊感情･脳科学･雑学･スピリチャル･KY･子どもの最善の利益･尾木ママ･スマホ･フェイスブック･ライン･いじめ自殺･体罰･子どもの貧困･無償化･子育て3法等、枚挙にいとまがない。

こうした中、第1に、1997年の『透明な存在である僕』と発した少年A（現在30歳）の言葉は、常に私の心を離れることはない。あの凄惨な事件は、日本中を震撼させ当初犯人は大人だと予測されていた。折しも、この年の講演会講師は、今、大ブレイク中の、尾木ママこと尾木直樹先生の年であり事件発覚の5月24日から逮捕された6月28日の間だった6月21日に開催されたものであった。自分のことを酒鬼薔薇聖斗と呼び、事件現場で被害者J君の頭部を切断後自宅の風呂場の天井に隠し、夜中に学校の校門に運んだという事件だった。今なお、何が当時14歳の中学生だった少年Aの動機（きっかけとは異なる）となったのかは現在も明確になっておらず、日本社会に残された病理の1つであるといえる。（参考文献　子どもの攻撃性に潜むメッセージ）

第2に、日本は『消費大国』社会を一層拡大しつつあるということである。自国で生産可能な食料をも（自給率40％）他国から大量に買いつけ消費し、他方で賞味期限切れの食材を大量に廃棄している国である。又、本講演会と同じ歴史をもつあるテーマパークは、面白さと非日常をお金で買う消費社会の縮図の1つでもある。消費社会は、物や人や事柄までも商品化し消費していく社会のことである。物は、必要だから買う時代から欲しいから買う時代へと肥大化し、付加価値合戦を続けている。人は、終身雇用制と年功序列型賃金という日本社会の高度成長期から続いた体系が崩れ、流動化と格差の中、勝ち組負け組なる競争を煽られ人が商品としてもの扱いされてもいる（市場化テスト）。物と人を繋ぐ事柄は、サービスという本来なら崇高な意味合いをもち得た概念から商品化（金銭化）され、応能負担から応益負担への道を突き進み富をもつ人ともてぬ人との格差を拡大している。又、面白さを買わせる商品化は、子どものあそび文化にとどまらず世代を超えた大人をも巻き込み射幸心をあおり、日常の仕事や生活で抱え込んだいいようのない不全感の潜在化を解消する手だてとしての様相を日常化し

ている。さらに、極めつけとしてのネットオークション＊）にみられる物や人や事柄の商品化は、消費社会を象徴し、市場原理という矢で貫かれている。＊）道路・消防車販売・結婚式代理出席等々）

第3は、人々の繋がり方がネット社会（検索エンジン・SNS等）により予測不可能な様相を示しつつ、地球時代を意味する爆発的広がりをもたらした。特定と匿名・組織と個別・時差と即時・点と面・知識蓄積と検索・多様と個・一方向と双方向・問いと答えの距離・身近な知人と見知らぬ共感者・本当と嘘・情報操作とセキュリティー等、人物事の繋がり方への正、負の変化をもたらした。

第4は、3・11に象徴される気候地殻変動は、私たちの依って立つ大地が常に危うさの上に立っていることを知らしめ、私たちの行き過ぎた欲望の暴発に大きな楔を打ち込み立ち止まることを余儀なくした。それであってもこの国は、数十年前からの原発問題を含む負の遺産から目をそむけ、まるで何もなかったかの如く振る舞おうとする姿勢を今も続けている。

第5は、先に掲げたキーワードに凝縮された子どもを取り巻く諸問題が、社会の発展と変化に呼応する形で表面化してきた。この背景の1つに、学校教育では『あるべき自分』を求められる一方、隣り合わせる消費社会では『あるがままに欲望を暴発させる仕掛けに組み込まれた自分』とのダブルバインドを感じながらの軋轢が、歪さとなって現れたと考えられる。

本講演会は、こうした変化の激しい社会の現状を深く捉えつつそこに立つ、親と幼稚園を含む教育機関や、地域住民とが子どもとどう向き合ったらいいのかという『関係論と意味論』を問い続けてきた。掲げた演題は、そうした時代を読み取ろうとする『過去と今とを結ぶ未来』へのメッセージとしての意味をもつ大きな意義があったと考える。

こうした意味からも、今回掲げた『憧れと生きる希望の子育てとは』と題する講演会への願いは2つである。**1** つは、学校に行かずとも大人になれた時代から行かなくては大人として働き生きていくことのできぬ社会への変遷は、知識基盤社会であると同時に、多様な価値と異質性とが自由に表明されつつ同じ地球船で生きねばならぬ運命共同体である両義においてグローバル化と持続可能性を乗り越えねばならない。そして、高度成長期の様な我慢して勉強すれば良き職業或いは幸せがつかめる時代は去り、必ずしもその企業が生き残れるとはいえぬ時代へと移り、いつ路頭に迷うやもしれぬすべり台社会になってきた。だからこそ、一度や二度ころんでも立ち上がれる自分づくりのための、憧れ（知的・感性的・身体的好奇心）を軸とした動機付け・意欲を原動力とし、教科書で学ぶ知識を記憶していく学習内容から、状況を分析し論理的に他者に説明し、情報を批判的に捉える能力。或いは、多様な知識をつなぎ合わせ問題解決に導く学習内容を源とした方向付けを、教育機関・親・地域社会がどう意味付け具体化していくかが、深く求められる**2** つには、その憧れをもって生きようとする過程には、必ずといっていいほどのためらい・辛さ・怒り・面白み・楽しみなど葛藤と躍動が伴う。対象に関わろうとするからこそ生じるその心の揺れを、あなたはあなたであって大丈夫だと応援してくれる『誰かの存在』なくして前に進めない。これが、生きる希望の礎となり未来を切り開く鍵となる。子どもを育てることは、『未来という希望の光を育む』営みでありこのバトンを渡しきることが、私たち大人の責任である。この社会実現のために私達は、『憧れと生きる希望』を持つことの意味を問い続け、『希望の灯火』を消さぬ直向さと、予測できない事態が起きても、様々な人々と協調しながら創造的な解決方法を見いだしていける人なりを育んでいかねばらない。本園は、幼児期を生きるこども達に、『対話的人格形成』という理念を掲げ、その民主的感性的土壌を培うべく地域の子育てセンターとしての役割を今後とも果たしていきたい。

新聞記事からみた講演会

遊び方知らぬ子供たち

月曜インタビュー

必要な人間関係づくり

教えたい〝つき合い〟法

最近の子供たちの中には、どう遊んでいいかわからずにじっと人の遊ぶのを見ている子が目立つという。ショッキングな話だが、御手洗さんは男性では珍しい幼稚園教諭としてクラスを持ちながら、地域の教育の考え方を高めるために、幼児教育専門家を招いての「子育て講演会」を毎年開いている。お母さん方の子育てのあせりを肌で感じながら、一人でも多くの人に聞いてほしいと念願した講演会は大成功だったが、夏休みを機会に現場で子供を見つめる立場の御手洗さんに聞いてみた。（聞き手・橋詰隆康編集局長）

地域教育講演会を開いた

徳山中央幼稚園副園長（みたらいけんじょう） 御手洗 賢成さん(30)

52年、竜谷大学文学部真宗学科卒。帰郷して専宗寺副住職のかたわら、久米中央児童館に勤務。57年から改組された徳山中央幼稚園副園長としてクラスを持って幼児教育に打ち込んでいる。

徳山市城ケ丘3－18－22

――遊べない子が増えているそうですが、どんなことです？

御手洗　何となくばく然と感じていたんですがね、私の園が五十八、九年の市私立幼稚園協会の研修園になったんで、問題点は何だろう、と話し合ったら、先生方から出ましてね。例えば「この色ぬっていいですか？」とか「外で遊んできていいですか？」と一々指示してもらわないと何もできない、とか、遊んでいる子に背を向けて、一人で砂遊びをしているなどです。

――お母さんたちのあせりが生んだものでしょうね。

御手洗　確かにそういう面はありますね。早くから小学校を意識して詰め込もうとする姿勢が強いですね。ものをしゃべらなくて困ると言いながら、自分が子供の先取りをしてしゃべってしまって気がつかない。だから、幼稚園に通う子でも勉強いが多いですね。

――そんなに早くから？

御手洗　ウチの場合でも、年長組百人のうち一割が習いごとをしてますから。だからというわけではないが、おせん立てしなければ自分では遊べない、用意してやらなければ何もしない、という無気力な子が増えているのは事実ですね。

――どういうふうな態度をとるんです？

御手洗　ただ、何もしないという状態ですね。砂にさわったり、オモチャをいじくったり。そんな状態は、望ましい子供像からはおよそかけ離れたものですよね。子供たちは戸外であれ、室内であれ、仲間とかかわり合いながら遊ぶというのが本来ですから。結果がどうだ、というような遊びでなく、手段、過程そのものが広がりなんで、ああ面白かった、となるわけです。子供と子供のつながりは、必ず物か人を介して出合いがあるんですから、ちょっかいを出したり、つついてケンカをしたりするのは、まあ、つき合いの初めで、本当を言えばつきあい方がわからないといった状態なんですね。

――最近の親たちは早くからパソコンなどを与えて、楽しむのを喜ぶようですが。

御手洗　問題だと思いますね。幼児時代に育てなければいけないこと、育ててはいけないことがありますから。この重要な時期に機械と向かい合わせていていいのかと思いますね。ケンカをし、仲直りをして、我慢することも覚え人間関係を作っていく時代ですね。少し前、あるお母さんから「少しは字を教えてもらわないと。すぐ小学校に行くのに、名前も書けないんですよ」と言われたことがあるんですが、リアルに人間を見る目を養うべきで、今持っている無限の可能性を摘んでしまうことになるんじゃないでしょうか。

――おたくの幼稚園ではそのためにどんなことを？

御手洗　遊び心を育てることを第一に考えてます。だから、ワークブックなどを考えずに、可塑性の高い素材、つまり、パック食品の包装材料朋のパック、牛乳の箱、ダンボール箱などを持って来させて、それとそ自日に工作をさせますし、チラシの裏やコンピューターの用紙の好きなものを描かせる、という方法をとってますよ。

――漢字を早くから覚えさせよという論がありますが。

御手洗　ウーン、字を読めるようになるとね、絵本の絵を読むばかりで想像力の広がりがそこで止まってしまうわけです。それよりも、例えばお店遊びをすると「おしまい」という字を教えてくれたりね。そしてすぐ吸収してしまうんです。必要になったら覚えればいいと思いますね。

地域の教育力向上へ

――ところで、幼稚園では珍しく地域の教育講演会を開いてますね。

御手洗　子供たちをはさんで、お母さんと先生の間にあるギャップを埋めたいのが念願なんです。昨年、久米公民館で開いたんですが、園児の父母はもちろん、地域で広く聞いてほしいと思って、今年は大阪教育大学の秋葉英則先生をお迎えしたんですが、久米小学校の体育館をお借りできて成功でした。

――盛況だったようですね。

御手洗　久米、周陽、桜木、久保の四小学校にチラシを配っていただいたんで三百人を超える方に聞いていただけました。中には六十代のおじいちゃん、おばあちゃんもまじってましてね。

――どんな話でした？

御手洗　「いま、わが子はたしかか」という演題でしたが、一口に言うと、母親には子供本来の姿が見えていない、ということですね。わが子の育ちようと確かめるポイントは、よく遊ぶかどうか、人つきあいはどうか、ということで、学力などは普通でさえあれば、いい、ということでしたね。例えば、非行に走るような子は、ともかく決して自殺しないんで、強いんだというようなことですね。八十点などとるのは点のとりすぎ、と思ってほしい、という話で、ある お母さんは「安心した」と言ってました。

――これからも考えか？

御手洗　もちろんです。経費は少々はかかりますが、地域の教育力を引き上げるのにお役に立つなら、何でもありません。来年の第三回は丸木正臣先生あたりを考えていますが、ある小学生のお母さんは「残念がった。一人で来ずにいろんなお友だちを誘ってくればよかった」と言ってくれましたが、苦労をした甲斐があったと思いました。私自身六〇年代に育った世代で、人とつき合う方法を知らん方ですが（笑い）それだけに、早くから人間関係を身につけ

昭和60年7月22日（月）第10308号

1985年

第1回

＊　初めての講師交渉。今でも、夕方6時頃河添先生にお電話をした時の緊張感と映像はは忘れられない。先生は、保険生理学が専門であった。

※　河添先生語録
足は第2の心臓である

幼児子育て講演会

中央幼稚園が初めて開く

最近テレビや雑誌で「子ども邦俊氏を招き、子育て講演会を行う。

もの体が蝕まれている」と いう言葉がさけばれている が、徳山中央幼稚園と同園 保護者会は六月二日、久米 公民館で「より賢くより健 高知大学教育学部教授河添 で、講師の河添氏は保健生 理学を専門としており、「 どの子もすばらしく生きる ため―「子育てのみちすじ ―「幼児期の育ちと中学生 の心と身体の発達」などの 著書がある。

講演会は今回が初めてで 同幼稚園が学校法人になっ て三年目を迎え、保護者と 園の子育てに対する考え方のギャップを、うめる 一つの試みとして開くもの

講演会は「足は第二の心臓である」といった心と体をともに発達させる方法など科学的な面からの説明がある。同幼稚園では「まさかうちの子に限ってということを、もう一度問い直すために共に考えよう」と子育てに関係する人の多数参加を呼びかけている。

第2回

＊　生まれて初めての長時間のインタビューに緊張したのを覚えている。場所は、園舎の現職員室エンジ色のソファーが懐かしい。

※ 大学時代観た映画、「どぶ川学級」のモデルであった須長先生のことが深く心に残っていた。先生の著書を『子育て講座』を読み込む内に是非と考え、出版者へ連絡し、ご自宅へ電話したことを思い出す。前日、食事をさせていただきながら、当時テレビ出演されていた『江守モーニングショー』のこともお話しされ我が子のいじめの問題も絡め『いじめ問題』について語り合ったことを憶えている。

※　当時、早期教育のことが話題になっていた時期「かしこさに」ついて宮城で講演される汐見先生のことを、ある雑誌で知った。当時、およびする先生の本とは異なる話っぷりがきになったため、主催者に、大胆にも講演の記録テープがあれば譲って欲しいとの電話をかけた。今では、考えられないが、主催者から早速の送付の約束を頂いた。聴講後、まもなく出版社を通じ先生の自宅へおそるおそるお電話をし、おいで頂くことを確約され有頂天になったことを憶えている。ただ、講演前日羽田からの飛行機が荒れた天候のため決行となり先生は、

盛況の子育て講演会

徳山中央幼稚園・須長さんの話に聞き入る

第４回

熱心に聞き入るお母さんたち

徳山市城ケ丘三、徳山中央幼稚園（御手洗賢成園長）主催の第四回子育て講演会が十三日、久米小体育館で開かれ子供づれのお母さんたち三百人が詰めかけ、ルポライターの須長茂夫さんが「自立のための子育て」と題して体験に根ざして話す講演に熱心に聞き入った。

須長さんは放任も過保護も過干渉も子育てからは遠いもので、放任は孤独に追いやって欲求不満を生み、過保護も成長ができないまま欲求不満を生むと説いたあと、いっしょにいたいという〝愛〟を与え、人間を与えようと説いた。

須長さんは共働き、二男の受けた〝いじめ〟の体験を通して、子供の奥底をつかみ、内面から指導することの大切さを説明したが、今は物が豊かになりすぎて、欲求がすぐ満たされる状態。これが子供を育てる二大条件である「生活」と「人間関係」を省略させているので、子育ての上でぜひ補ってほしいと訴えて、お母さんたちの拍手を浴びていた。

第５回

今日の顔

子育て講演会が五回目

徳山中央幼稚園長

御手洗　賢成さん(33)

地域ぐるみによる教育の具体化として、園に近い久米小学校体育館を借りて年一回開く子育て講演会が五回目を迎えた。園児の父母だけでなく、周南全体からお母さんたちが集まり、参加者は毎回三百人を超える盛況だ。

住職を継ぐために竜谷大学を卒業したが、九年前から実家の城ケ丘、専宗寺に併設されていた児童館の子供たちの世話を始め、五十六年に学校法人化して幼稚園にした。園長に就任したのは昨年四月。まで、夏はショートパンツにTシャツ姿で子供たちと駆け回る。日曜日も授業の準備や研究会での発表準備に忙しい。

講演会は一年前から準備を始める。最初に印象に残った本の著者などから候補者を選び、出版社などに問い合わせてお母さん方に役立つ講演をしている人かどうかを調べる。講演の依頼は電話。半年がかりで情報を集め、地域ぐるみの子育てのための講演会であることを説明「断わられたことはない」という。

十一日の講演は大阪教育大教授の秋葉英則さん。昨年九月に依頼したという。もちろん無料だ。小学三年、一年、同園年長組の男児の父親。もちろん上の二人も同園の出身だ。

※2回目においで頂いた秋葉先生に、再度お願いし快諾を頂いたことで安堵した記憶が、いまでも。研究室への電話のタイミングが良かった。

その日、実家の堺市まで移動され、朝一番の新幹線でお出でいただき冷や冷やしたことを憶えている。その後、今回を入れて7回もお呼びすることになるとは予想だにしなかった。又、お渡しした記念の花束を、宅配便で送って下さいとのことを申し出られ、夫婦愛の深さを感じた。

第７回

熱心に聴講するお母さんたち

〝かしこさとは…〟にどっと

●徳山中央幼

子育て講演会熱心に

「かしこさってなんだろう」をテーマに徳山市城ケ丘の徳山中央幼稚園（御手洗賢成園長）と同保護者会（三原佳子会長）主催の第七回子育て講演会が十六日、久米小体育館で開かれ、幼児を持つお母さんを中心にした二百八十人が講師の汐見稔幸東大教育学部助教授の説く人間的に〝かしこく〟生きるとは何かについて熱心に聴き入った。

この子育て講演会は毎年一回、同幼稚園が広く地域に開放しているもので、大きな実りをもたらしている。

汐見さんはまず日本の子供たちは世界で一番勉強時間が長く、成績もいいのに、成長して人間的にかしこく生きているとはいえない事例があまりにも多いことを東大生の例などから説明。さらに知識を詰め込むだけでは生活に生きる知恵とならず、人間らしいかしこさにつながらない、子供自身が問題にぶちあたることを大事にしてほしい。人間らしい優しさと勇気をもってハンディのある人を思いやる心を、また非人間的なものを許さない人間、自分の間違いを素直に認める勇気を持った人間に育ててやってほしいと話した。また、これらは親自身がいかに人間らしい生活を送るか、私たち大人につきつけられている問題だろうと結んだ。大きな感動を与えて

第１４回

“いじめっこ子”なくす努力を

徳山・子育て講演会・尾木さんの講演に熱心に

会場でお母さん方に質問する尾木さん（右）

徳山市城ケ丘の徳山中央幼稚園（御手洗賢成園長）が続けている第十四回子育て講演会が二十一日、久米小体育館で開かれ、教育評論家の尾木直樹さんが「いじめのむこうに見えるもの」の題で話し、子供連れのお母さんなど三百八十人が熱心に聞き入った。

この講演会は同幼稚園が保護者会（山本真梨子会長）とともに毎年取り組んでいるもの。尾木さんは、わが国で初めていじめっ子側に視点をあてた「いじめっ子～その分析と克服法」の著者としても知られている。

尾木さんは、自分の娘が小学四年のときに学校でいじめにあい、不眠症、食欲不振などに悩まされた体験から本人や支える家族の苦労を話した。またスウェーデンやノルウェーの「いじめ防止法」を引き合いに、いじめられる子の保護を考えることよりもいじめっ子をなくすことに全力を挙げるべきだと説き、学校や家庭で子供たちと向き合う姿勢を見せてほしいと訴えていた。

※　当時も吹き荒れていたいじめ問題に、このひとならと依頼した。勿論今日の大ブレイクは、要素宇田にしなかった。嬉しいのは、尾木ママと呼ばれるようになってからも当時の根っこの主張は変わっておらず本園教育の根本の1つにも根付いている。
※ 学力と背筋力の関係を述べられた講師は、初めてだった。企業への就職から東大への再入学その後大学教授と異例の経歴を持たれる広木教授。現在学長。※加藤教授に、思春期と早期教育の関連について話していただいた。この頃から、思春期と幼児教育の関連をいよいよ深めようとしていた。

第１１回

●徳山中央幼稚園●

広木長崎総科大教授が講演

子育て講演会

「深刻な背筋力の不足」

徳　山●

熱心な子育て講演会

徳山市城ケ丘の徳山中央幼稚園（御手洗賢成園長）が地域に広く呼びかけ、久米小体育館を会場に開いている子育て講演会が十一回目になって十八日開かれ、激しい雨の中だったが、小さい子供を抱いたお母さんたちがぞくぞく詰めかけ、熱心に聞き入った。

毎年一回、同幼稚園と保護者会（稲本みどり会長）が開いているもので、今回は長崎総合科学大の広木克行教授が「真の学力とは何か」の演題で講演した。

広木さんは教育原理、教育心理が専門だが、長く登校拒否児のカウンセリングを続けており、その体験もまじえながら、ヒトの子供がどうやって人間として成長していくか、賢い体、賢い心に支えられて賢い頭ができていくためにはどうあればよいかを説いた。

それによると、現代の子供たちは、友達と交わる力が決定的に低く、大人との関係の中だけで成長するため、偽りの〝いい子〟だけで大きくなり、自分を主張することができず、ついに爆発せざるを得なくなる例が想像以上に多いという。

さらに、小学校新入児の大半が体力が極めて低く、とくに昔は遊びで養った背筋力が落ちているため、授業に集中できず、倒れても手で支えることもできない子供が増えているのもそのためだという。

広木さんはこうしたことから、ヒトが人間として知性を身につけることの難しさを改めて知り、友達との交わりの力を身につけること、第一反抗期の二歳半から三歳の子供に十分に自我を養わせて本当の自己を主張させる道を切り開かせること、さらに背筋力を中心とした体力をつけることの大切さを説いて、お母さんたちに感銘を与えていた。

この講演についての問い合わせは同幼稚園（0834・28・5288）へ。

第１３回

講演する加藤助教授

超早期教育で奪われるもの

●徳山●

加藤山梨大助教授が解説

――子育て講演会熱心に

徳山市城ケ丘の徳山中央幼稚園（御手洗賢成園長）が保護者会（井関桂子会長）とともに一般に無料で開放しながら毎年開いて十三回目を迎えた「子育て講演会」が十五日、久米小体育館で開かれ、山梨大学教育学部の加藤繁美教授が「思春期を見通した早期教育のもつ意味」と題して、次第に広がろうとしている超早期教育が何を生み、どんな結果になろうとしているかを話し、お母さんを中心にした参加者は熱心に聞き入った。

加藤さんは幼稚園のころから家出を重ねるマンガの主人公を取り上げ、大人の思いと子供の思いがどんなに違うか、どう接点を求めるかから説き、超早期教育が次第に広がろうとしていることを解説した。

超早期教育は一、二歳コース、四、五歳コースと続き、生後八カ月からの生徒がいること。とくに二歳という年齢はやっと会話が成立し始めるころだが、この一年でだれも教えないのに、文法構造を連用活用までマスターするすごい年齢であることを説明した。

このため、二歳のときに集中的に教えれば三歳で連立方程式を解き、小学二年生で高校三年間の数学をマスターすることは実際に可能だという。

しかし、知識は使わなければ完全に忘れ去るのが人間の脳の素晴らしさであり、成人してみると、早期教育の成果は全くゼロになっているという。

一方では、社会生活を最初に学ぶ〝ごっこ遊び〟などをしているひまがないため、四―五歳から学齢期になって挫折する例が多いことを実例をあげながら解説して、お母さんたちの理解を求めていた。

第１４回

防長評論

子供の目線

徳山市城ケ丘の徳山中央幼稚園（御手洗賢成園長）が続けている第十四回子育て講演会が二十一日、久米小体育館で開かれ、教育評論家の尾木直樹さんが「いじめのむこうに見えるもの」の題で話し、子供連れのお母さんなど三百八十人が熱心に聞き入った。

「32、53、25、45、52、32、41」。「これ、何の数字か分かりますか」。先日、徳山市の久米小体育館であった「いじめのむこうに見えるもの」と題した講演会（徳山中央幼稚園と保護者会主催）の冒頭、講師の教育評論家、尾木直樹さんは黒板に数字を書き、質問した。

380人の出席者で、ポケットベルのメッセージと分かった人は数人。

読み方は「死ぬことにした」。今年1月、いじめを苦に自殺した、長野県須坂市の中学1年の男子生徒が書き残したメッセージだ。昨年12月下旬、国語の時間に「自分の1年の10大ニュース」としてノートに書いた。

ノートを見て教師は、何のことか分からなかった。生徒にあえて、問うこともなかった。中学生は、年が明け、新学期が始まる直前に自殺した。

尾木さんが訴えたかったのは、子供が苦しんで死のうとする時には、必ず子供からメッセージがあるということだ。

冒頭の数字は、簡単な仕組みだ。二桁の十の位の数字は「あかさたな…」の順番。一の位は「さしすせそ」「なにぬねの」などの頭から何番目かを決める数字。これを組み合わせて、数字を言葉に代える。

この数字は、仮名、漢字やローマ字と同じように、若者の大切な意思伝達手段になっていると尾木さんはいう。若者の「常識」を、講演会に参加した父母の大半は私も含め、知らなかった。自殺した中学生の先生も。

「子供が出すメッセージを逃してはならない」といくら叫んでも、「大人が子供の目線に降りていかないと、子供の気持ちは分からない」と尾木さんは訴える。

ポケベルの話だけではない。昨年、文部省が発表した児童生徒、教師、保護者計2万人対象の調査結果によると、子供がいじめられていることを訴えたのに、小中学校の親の3割が気づかなかったという。

尾木さんは説明する。例えば、子供が「下敷きをなくした」と親に言う。「今年に入って3枚目じゃない。今度なくしたら、もう買ってあげないわよ」と母親。こう言われて、子供は黙って自分の部屋に行ってしまう。下敷きを友人から割られるいやがらせが続いている事実を、言いそびれてしまうのだ。

教師も同じことだ。「げた箱の靴が無くなりました」と中学生が職員室に言いに来る。「名前書いておいたのか」と教師。「書いていません」。「書いておけと注意したろうに」。「すいません」と生徒は委縮して職員室を出る。実は生徒は、再三の靴隠しのいやがらせを訴えたかったのだ。

子供はメッセージを発している。「子供の目線に」を私も親の一人として自覚せねば。

徳山支局長　松田幸三

1998年（平成10年）6月21日（日曜日）　山口東　やまぐちひか

対人関係　運動　言語

三つの能力を伸ばせ

大阪教育大副学長が力説

徳山で子育て講演会

人間味あふれる語り口で講演する秋葉さん

徳山中央幼稚園（徳山市城ケ丘、御手洗賢成園長）の第15回子育て講演会が20日、同市久米の久米小体育館であり、秋葉英則・大阪教育大副学長が「自分づくりの子育て」と題して講演。園児の父母ら約300人が参加した。

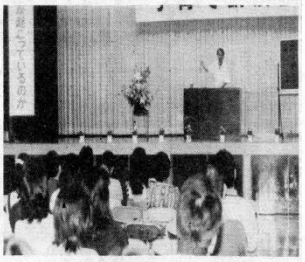
秋葉さんは、子どもの人生を切りひらくのは学校での学力ではなく、大切なのは学校で学んだことを受け止める受け皿を磨くことと指摘。そのために必要なのは、対人関係能力、運動能力、言語能力の三つで、子どもにただ勉強しろと言うだけでなく、この三つの能力を伸ばす子育てをすべきだと訴えた。【諫山　耕】

第１５回

※　10回記念大会の際、15回のお約束をさせていただいていた。先生の話術は、臨場感と高揚感を合わせたものであり大阪の藤山寛美の演劇で学んだとのお話を頂いた。
又、第10回の時の講演後の懇談で、当時の私に「張りつめた糸は切れやすい」の苦言を呈していただいたことを今も感謝している。現在、大阪の短大の学長をされている。　子どもを愛している　つもり

子供に遊びの体験を！

徳山・徳山中央幼稚園・子育て講演会熱心に



河崎教授の話に聞き入る参加者

徳山市城ケ丘の徳山中央幼稚園（御手洗賢成園長）と同保護者会（兵庫きよみ会長）は十九日、久米小講堂で三重大学教育学部の河崎道夫教授を招いて第十六回子育て講演会を開き、三百人が「今、子ども心に何が起こっているのか」の演題で学級崩壊や子供による凶悪犯罪などの背景に迫り、子育てのあり方を探る話に聞き入った。

河崎さんは子供たちに遊びの体験をさせずに「何でも命を大切に」と言い聞かせている今の教育について「体験なしで言葉で言っても実感はない」と批判した。

またファミコンの販売開始、東京ディズニーランドがオープンした一九八三年（S58）、横浜で中学生のグループが浮浪者を殺害した事件が起きたのを皮切りにいじめ、自殺、オウム事件、神戸の中学生による児童殺害事件と相次いでいることを指摘した。

「どちらもすべて与えられるファンタジー。現実はつらく、厳しく、ファンタジーはそれを忘れるという構図ができている。生の自然、物、人々とのかかわりがあって面白いものを作り出すことを失わせている。これでは自我が形成できず、生きている実感がないから、人を殺したという実感もない」とさまざまなことを体

第１６回

※　河崎教授の主張のキーワードは。面白さを買うという今の子どもの生活が、自分感覚を鈍らせる根源であるとのこと。面白さは、過不足長短のある現実の本物との格闘の中にこそありとのこと。講演後の職員との懇談ではダンゴムシの話や園長が、アヒルごっこをしたことの話で盛り上がった。教授は、びゅんびゅんごまの6個同時回しの名人であることも披露。巨大ゴマを職員が回したのも印象的。　※ 村山教授の著書『子どもの攻撃性に潜むメッセージ』に衝撃を受け講演を依頼。少年Aの事件との関連ありか？の伏線。よい子であらねば、見捨てられてしまうのでないかという不安感が恐怖心となり暴発の背景ともなっている。しかも、そこには、匿名的で明確な意図なき病理的要素があることを指摘。
※ 汐見先生は、池田小学校の事件をとりあげ、学校と地域のあり方を問いかけられた。懇談では、汐見先生の世界的視野での日本の教育論に職員一同感心させられた。（OECDの学力観、学力テスト）

第１９回

子供の"暴発"に深い考察

●徳山　村山大東文化大教授が指摘

徳山中央幼稚園の子育て講演会

講演する村山さん

徳山市城ケ丘の徳山中央幼稚園（御手洗賢成園長）と保護者会（山崎文子会長）主催の第十九回子育て講演会が十五日、久米小体育館で開かれ、大東文化大学の村山士郎教授が「なぜ"よい子"が暴発するのか」の演題で話し、たくさんの父母が熱心に聞き入った。

広く父母に公開する講演会として毎年一回、開いているもので、村山さんは子供の変化と社会の変化との関連を研究し「衰退する子どもの人間力」「子どもの攻撃性に潜むメッセージ」など著書も多い。

村山さんはまず、一九八〇年代初頭に全国で起きた校内暴力は、学校や教師に対する反発や抵抗で、理由も明確で子供たちも健康的だったと強調。それが九〇年代に入ると暴力性を発揮する子供たちが出現。次々に重大な事件が起きたと指摘した。

また、村山さんは最近子供たちの生活時間の中に"せきたてられるシステム"が確立され「退屈で満足できない生活」が不安や不満として広がっていることをあげ、その結果、明確な理由もなく人を傷つける子供たちが出現していることを紹介した。

村山さんは学校での体罰や機械的な指導を見ただけで学校に行けなくなった実例もあげながら「それでも子供は未来志向」であり、子供たちが暴発する理由の一つである不安を取り除く大切さを強調した。

つむじ風

▼徳山中央幼稚園が毎年この時期、久米小講堂を借りて父母に公開している"子育て講演会"が今年で十九回になったから、御手洗賢成園長の努力には感嘆するばかりだ。

▼実はこの講演会に参加したのも十八回目だったのだが、今年は初めての大東文化大学の村山士郎教授が「なぜ"よい子"が暴発するのか」と題する講演を聞いて、今の学生の"言葉"の問題には関心を持たされた。

▼その中で、戦後、日本人は身長が伸びたが、この三十年間に男で四・八㌢にも達したのは、三百年間に四、五十㌢も伸びる計算で、人類史上考えられないスピードだというのである。

▼これに対して運動能力は走力、背筋力、幅跳びなどすべての面で軒並み低下しているのだから、動物としている人間を支えている部分がガタガタになっていることになる。

▼それと並行して学力の基礎になる言葉が貧困になっているのは驚くばかりで、最近よく言われる"分数計算のできない大学生"もそのためだろうというのが村山さんの推測だ。

▼これらの大学生は成績のよかった人たちなのだが、言葉の貧困からこれまで学んだことがたちまちはげ落ちて、その度合いも早まっているのだろうとも推測するのだ。

▼人間の感情、思いを保っていく働きを担っている言葉が豊かに発達せずに、一つの言葉で一つのことしかわからないのでは自分の感情を置き換えることができず、単語を叫ぶしかできず、単語を説く村山さんの話には説得力があった。

▼自然の中の豊かな体験が言葉を豊かにし、それが学力を保証して行く基礎だとすれば、子供たちが学校から放たれた週休二日はまたとない好機にできる。地域社会が子供たちの言葉を豊かにする教室になろう。（隆）

※ 2／5／10／15／20回と講演会の節目に来ていただいた。当時、大阪教育大学の副学長で附属池田小学校の事件に心を痛めておられた

秋葉教授が「子供の健やかな成長を」

第２０回 ●周南徳山●

徳山中央幼の子育て講演会が20年

周南市城ケ丘三丁目の徳山中央幼稚園（御手洗賢成園長）と保護者会（村山育子会長）の子育て講演会二十周年記念大会（新周南新聞社など後援）が十四日、久米小講堂で開かれ、秋葉英則大阪教育大教授が「子どもたちが健やかに育つ時代をつくろう」と題して話し、約三百人が聞き入った。

秋葉教授は一昨年まで同大学副学長を務め、付属池田小事件を経験し、その後も子供たちの心のケアなどに関わっている。

この日はまず御手洗園長が最近は大人の都合で子供の生活を作り上げていると指摘し「二十年を機にもう一度、立ち止まって考えてみたい」とあいさつ。村山会長は「子供の健やかな育ちとは何かを講演を通して考えてみてほしい」と呼びかけた。

秋葉教授は国立大学を卒業して就職してもすぐにやめ〝閉じこもり〟やフリーターになる学生が増えている現状や学級崩壊などを例に、最近の子供は自己中心性が強くなっていると指摘。社会に交わる力を子供に植えつけるのが親の義務で、親が口だけでなく言動で子供の範にならなければならないと訴えた。

増山早大教授が「子育ての「自立への出発点は幼児

●周南徳山●

講演する増山教授

周南市城ケ丘の徳山中央幼稚園（御手洗賢成園長）の二十二回目になる子育て講演会（新周南新聞社など後援）が十一日、久米小体育館で開かれ、早稲田大文学部教授で東大客員教授も務める増山均さんが「かならず実る　子育てのひみつ」と題して講演した。

講演会は保護者会（松田美穂会長）と共催で、久米小の協力で開いている。この日はまず御手洗園長が光高校で起きた男子生徒の爆弾事件に触れ、幼児教育の大切さを訴えた。

このあと増山さんは自らの子育て経験を披露しながら子育てで最もトラブルが起きる思春期は

徳山中央幼

※ 22回講演会にやっと来ていただいたという思いがあった。早稲田大学の学生たちとの竹林を守る運動や、竹に付着している白い粉に抗菌作用卯があるなど環境との共生という点でも大きなご示唆をいただいた。安心・自信・希望なのか、不安・不信・失望かの選択。冷たく、竪苦しく、あわただしく、でなく暖かく、柔らかく、ゆったりとした風に吹かれたい。そんな子育て社会を育てたい！

第２２回

つむじ風

▼人生には危険地帯が四つあり、中でも最も危険なのは思春期」という話を聞いたばかりなのに、相次ぐ思春期真っただ中の犯罪続発にリツ然となる。

▼徳山中央幼稚園の子育て講演会で早稲田大学の増山均教授の話にあったのだが、光高で三年生が手製の爆発物を隣の教室に投げ込んで重軽傷者多数を出すという大事件の翌日だっただけに身にしみたものだった。

▼甘やかされ、まじめでいい子で育った子供が、危険地帯の思春期に入っていく準備をする機会がないままだった例が少なくないのだろうが、その後に続いた事件も家庭内の問題が大きかったようだ。

▼一つは東京・板橋区で起きた高校一年男子の両親殺害事件、もう一つは福岡市で中三の少年が兄弟ゲンカの末に十七歳の兄を包丁で刺殺するという恐ろしい事件だ。

報道された内容でしかないのだが、両親殺害事件は社員寮の管理人だった父親に毎日、仕事を押つけられ、確執が激しくなるうちに殺意を抱くようになったという。

何でも素直に言うことを聞いていた少年をいつでも子供と思っているうちに、これまでなら自に目覚めて家出したろに、一挙に父親を殴りし、さらに帰宅した母を「かわいそうだから」と刺殺したりだからを覆いたくなる。

タイムスイッチを仕掛逃げたあとでガス爆を起こすなど凶悪な犯だが、家族の中でだれ訴えるすべもなく、追詰められた少年も、考れば悲劇の被害者なのう。

危険な思春期をいかに来への跳躍台にさせるは、いつの時代も大切難しいものだが、少子の今、親が愛情でくるながら、幼い時から次に巣立ちさせていく賢な努力が最も大切な時であろう。（隆）

第２５回

つむじ風

▼徳山中央幼稚園の御手洗賢成園長から年一回、連絡をいただく子育て講演会に時の流れの早さを実感してきたが、今回は第二十五回で四半世紀の歴史を刻んだのだから偉業と言っていい。

▼幼稚園が保護者会とともに専門家を招いて講演会を開くのも大変だが、小学校の体育館を借りて無料で一般に開放し、それを長年続けるのは並み大抵のことではない。

▼一九八五年（S60）にこの講演会に初めて出席し、とっくに子育ては終わっていても練達の講師の内容の濃さと面白さで昨年まで二十三回を欠かさず聴講したから、今年は二十四回目になった。

▼今回は「思春期を見通した子育てとは」と題して白梅学園大学学長の汐見稔幸さんが話したが、まず一九八三年（S58）生まれの十七歳たちが次々に凶悪犯罪を起こし、今回の秋葉原事件もその延長上にあると指摘した。

※ 汐見先生2度目の2回連続

▼そして、思春期はそれまでの自分を自分で作り替え、育てる時期だが、そのためには乳幼児が体験しておくべきことを経験しなかったから、彼らにはそのツケが残ってしまったというのだ。

▼生きることが不安な乳幼児は泣いて不満を訴えるが、そのつど親がすぐ解決してくれるため、子どもは無条件に愛され、守られていることを理解し、他人を愛することを学習するのだ。

▼次は自分に何ができるかを水道の蛇口をひねってみることから試しながら個性を育て、自分への信頼感を育てて思春期につなげていくという。

▼乳幼児期から体罰を受けて頑張らせられ、考えて結論が出せるという自分への信頼感が消えてしまい、それが膨大な引きこもりを生んでいるという話にはうなずかされるばかり。汐見さんは「犯行の責任の半分は親にある」と断言したが、少なからず同感だった。（隆）

※ 来演頂くきっかけは、『若者たちに今何が起こっているのか』の著書を読んだこと。難解な著書だったが読み応えがあった。思春期のこども達のサブカルチャーへも深い見識を持たれ、見放されたという恐怖感と虚脱感が、何があっても動揺しない平気感覚を生みおびただしい血を見ても動揺しない少女A、そんなこども達にネットケータイは？

ネット、ケータイは

「遠ざけず、人間的な世界に」

中西さんが青少年の現状詳しく

096/22

徳山中央幼稚園の子育て講演会

●周南徳山●

第２６回

講演する中西教授

周南市城ケ丘の徳山中央幼稚園（御手洗賢成園長）の第二十六回子育て講演会（新周南新聞社など後援）が二十日、久米小体育館で開かれ、横浜市立大学国際総合科学部の中西新太郎教授が「ネット・ケータイ時代を生きる子育て」の演題でインターネットや携帯電話の使い方を通して見える現代の青少年の心理について詳しく話し、約三百人が聞き入った。

同幼稚園、同園保護者会の主催。御手洗園長はあいさつで「今の思春期の子は心地よく人とつながりたいという気持ちが強い一方、周りの空気をとても気にして生きている」と述べた。

中西さんは子どもの成長が家庭と学校だけを行き来する〝振り子型〟から、子どもの生活にも消費文化が入って〝トライアングル型〟になり、趣味や関心分野による個体化が進んだと指摘した。

さらに、どんなに孤独な人でもネットの世界では居場所を見つけ、もう一つの自分を生きられること、また〝学校裏サイト〟の中傷など自己中心的な振る舞いの中に安心して生きられる場所がほしい、という願いがあると説明。「新しい出会いの魅力から子どもたちを遠ざけるのは現実的ではない。子どもたち自身が自分たちの世界を人間的なものに仕上げていける力を育てることが重要」と呼びかけた。

つむじ風

09.6.23

▼毎年のこの時期、著名な教育学者を招いて市民に無料で開放して二十六回目になった徳山中央幼稚園の子育て講演会が今年もお母さんたちで盛況だったのはうれしかった。

▼この講演会は御手洗賢成園長が久米小の協力を得て独自に続けているのだが、自分の子育ては三十年も前に終わっていても勉強になることが多いから第二回から欠かさず聴講もし、紙面でも詳しく紹介しているのだ。

▼今回も御手洗さんから前もって電話で日程を知らされたが、中西新太郎横浜市大教授を迎え、演題が「ネット・ケータイ時代を生きる子育て」と教えられ、ネット全盛の今の時代、最も必要なテーマと感心したものだ。

▼中西教授は講演の中でインターネットや携帯電話によって孤独に陥りがちな子どもたちがネットの世界で居場所を見つけることは大きな利点であり、新しい出会いの魅力から遠ざけるのは現実的ではないと述べた。

▼その一方で高校生の九六％が持っているため付き合い方も大きく変化して自分のことをわかってくれる人を探す道具にもなっているし、未知の人と会う機会が増えるだけにさまざまな危険が考えられると説いた。

▼だから親は携帯電話を与える前に、人間の尊厳を大切にすることがどんなに大事かをしっかり教えておき、困った時はいつでも親がついていることを理解させることが大切と呼びかけた。

▼今、誰に悩みを打ち明けるかの調査では世界で母親がトップ、日本でも父母になっているが、一方では誰にも話さない若者が急速に増えているのだという。

▼便利なだけに携帯電話が親子関係も変えてしまっているということだろうが、携帯を子どもに与える前に事前の十分な配慮が大切であることが改めて理解できた。（隆）

※ 28回 講演会の歴史では初めての女性講師！きっかけは、『時間』親ルールから自分ルールへの著書。感情にまかせての早くしなさいでは子どもの考える力の育ちを奪うことになる。これからの子育てに具体的指針となる必見の著書。

「早くしなさい」は禁句

高取さんが"じぶん表現力"強化策

●周南徳山●

2011/6/14

徳山中央幼稚園の子育て講演会に200人

第２８回

来場者に話しかける高取さん

周南市城ケ丘の徳山中央幼稚園（御手洗賢成園長）と同保護者会主催の第二十八回子育て講演会（新周南新聞社など後援）が十一日、久米小体育館で開かれ、NPO法人JAMネットワークの高取しづか代表が「子どもが変わる 親ルールから自分ルールへの育て方」と題し、自分で優先したいことや本当にしたいことを考え、時間などが管理できる自立した子どもに育てるにはどうすればいいかを話して、父母ら二百人が聴き入った。

この講演会は年一回開かれ、今回は子育ての基本となる考え方だけでなく、どうすればいいのか、具体的に話してもらおうと「子どもが変わる自分ルールの育て方」シリーズなどの著書があり、ワークショップで子育ての助言、指導をしている高取さんを招いた。

高取さんは夫の転勤に伴って暮らした米国で早くから子どもに自分で判断したり、表現力を身につけさせる教育をしているのを体験して、今後の日本でもそうした教育が必要と感じて現在の活動を始めた。高取さんが目指す〝じぶん表現力〟には恐れずに言いたいことが言える度胸力、論理力など七つの力があると説き、客席に入ってゲーム形式のトレーニング方法も実演した。

そして子どもが何をすればいいのか、リストを作成するなど視覚化することや、子どもがすることを見守るだけで手伝わず、また「早くしなさい」と言わないこと、失敗を経験させることの大切さなどを説明して関心を集めていた。

※ 初めての医師の講演。脳科学ばやりと不況との関係を述べておられる著書に出会う。日本赤ちゃん学会の会長さんでもある。オランダでの留学経験を基にした理論を具体化しておられる

「赤ちゃんに触らせること大切」

脳科学の小西教授を講師に

●周南徳山●

徳山中央幼の講演会に250人

第２７回

講演する小西教授

周南市城ケ丘の徳山中央幼稚園（御手洗賢成園長）の第二十七回子育て講演会（新周南新聞社など後援）が十九日、久米小体育館で開かれ、同幼稚園、同園保護者会（河内直代会長）の主催。御手洗園長は「近年、一緒に考えましょう」と呼びかけた。

小児科医で日本赤ちゃんの小西行郎教授が「脳科学があかす育ちのしくみ」の題で子育てを考えるうえで注意すべきことなどについて話し、約二百五十人が聞き入った。

同幼稚園、同園保護者会（河内直代会長）の主催。御手洗園長は「近年は脳に良い、悪いという言葉が氾らんしてきている。この講演を聞いて冷静に考えたい」とあいさつし、河内会長が「子育てに脳がどう影響するのか、一緒に考えましょう」と呼びかけた。

小児科医で日本赤ちゃん学会理事長でもある小西さんは、乳幼児期の子どもの教育とは粘土細工ではなく彫刻であり、元々持っている力を彫りだすものだと説き、子どもが自分という地図を埋めていると説明。「触覚を鍛えることが軽視されているのは、スキンシップに大切なのは赤ちゃんに触ることより触らせること」と訴えた。

また赤ちゃんは自分の体を触ったり、足をなめたりすることで認識しなければいけないと説き、「子どもが自分という地図を埋めていると説明。「触覚を鍛えることが軽視されているのは、スキンシップに大切なのは赤ちゃんに触ることより触らせること」と訴えた。

また赤ちゃんは自分の体を触ったり、足をなめたりすることで認識しなければいけないと説き、「子どもが自分という地図を埋めていると説明。「触覚を鍛えることが軽視されているのは、スキンシップに大切なのは赤ちゃんに触ることより触らせること」と訴えた。

西さんは、乳幼児期の子どもの教育とは粘土細工ではなく彫刻であり、元々持っている力を彫りだすものだと説き、子どもが自分という地図を埋めていると説明。「触覚を鍛えることが軽視されているのは、スキンシップに大切なのは赤ちゃんに触ることより触らせること」と訴えた。

また赤ちゃんは自分の体を触ったり、足をなめたりすることで認識しなければいけないと説き、「子どもが自分という地図を埋めていると説明。「触覚を鍛えることが軽視されているのは、スキンシップに大切なのは赤ちゃんに触ることより触らせること」と訴えた。

講師の先生からのメッセージ

地域の子育てのセンターとしての営みを大切にしておられる貴園の営みに敬意をもって学ばせて頂いています。

２１世紀は自律的人権の時代といわれています。自律的人権の時代とは、大人も子ども、お年寄りも、男性も女性も、自分が納得できる形で自分の行為を選び、自分らしく人生を歩む権利です。幼稚園は、この権利を保障する為に大切な社会的役割を担っています。

自律的人権を実現する為には、それぞれが自分の要求や考えを主張し、意見が異なる場合、葛藤を避けるのではなく、話し合って折合いを付け、一致点を見い出し、一致した願いを実現する為の行動を立ちあげる力を身につけることが必要です。学び合う人と人の繋がりの輪が大切になります。

この視点からも、貴園の「子育て講演会」は貴重な役割を果たしています。

自律的人権を大切にする為には、乳幼児をもつ親の「子育ての権利」を保障することが大事です。そして、働ける状況になったら働きたいという親の願いを実現できる・「働く権利」の保障も大切になります。親のなかには、わが子が大きくなるまでは、家庭にいて、わが子の帰りを待ちたい、その間、

第３回　安部富士男　先生

家庭にこもるのではなく、仲間と、人形劇ゃコーラス、絵本の読み聞かせを楽しんだり、原発の是非を仲間と考え合ったり、ＰＴＡ活動に参加したりして、仲間を増やし、仲間とつながることを大切にしたい、時期がきたら、上記の活動で学んだことを生かし、仕事をしたいと考える人もいます。

自律的人権の時代は人間の生き方の多様性を大切にする時代ともいえます。

産休あけから直ぐ働きたいという人もいれば、子どもが「むしょう」に可愛いい時代、わが子と共にある生活を楽しみたいという人もいます。

その両者が自分の生き方を豊かに築きながら、子どもたちの健やかな育ちを確かなものにすることが大切です。

ところが、今、経済の論理で保育園を重視し幼稚園を軽んずる政策が強行されようとしています。しかも、待機児解消を「うたいことば」に、劣悪な保育環境も是認する傾向がみられます。

このような状況にあるからこそ、それぞれの園が建学の精神を再確認し、自律的人権の時代に相応しい保育環境・保育を創造すること、学び合う場は益々大切です。

この視点から貴園の子育て講演会30周年を祝福します。お互いに頑張ろう。

地域にしっかと根ずいた幼児教育のあり方を追求され30年。

敬意を表します。大変ドウモイマス。

地域の発展を祈念いたします。

教育の世界から経済の原理を追い出さないことには子どもたちの未来はなしかなものに成りません。

この原理をなくそうと追求していきたいものです。

大阪健康福祉短期大学
〒590-0014 堺市堺区田出井町2番8号
TEL 072－226－6625
秋葉英則

第２・５／１０／１５／２０回

秋葉　英則　先生

三十周年おめでとうございます。

「うまくいかなくても、うまくいかなくても、うまくいかなくても、さいこういいことがあると、明日への光や暖かさを感じる」力や心性を育てること。そのためには、子どもたちに寄り添い続けること、そして、ゆったりと懐に抱かれていると、う安心をこどもたちに心底から感じてもらうことが求められているのかな、と思う日々です。

第８回　渡辺　弘純　先生

子育て講演会が30周年を迎えたとのこと。園と家庭の協働によって子育てをしようとする一貫した姿勢に敬意を表します。

この30年間、社会の急激な変化による子育て環境の劣化は保育に当る者にとって、最大の悩みでした。この状況に対して、積極的に学びの場を提供し、保護者と共に子どもと環境を見る目を磨いて来られたことは、教育機関としての幼稚園の鏡とも言うべきことです。

30周年を一つの区切りとして、更に学びの輪を広げ、地域の子育てセンターとしての役割を一層活発に果されることを期待しています

第１１回　広木　克行　先生

子育て講演会、３０周年、おめでとうございます。そして、ご苦労さま。

「学ぶことの唯一の証は、変わることである」と言った人がいますが、自分が「変わる」ことほど楽しいことはありません。人はそれを「発達」と言ったりするのでしょうが、そんな言葉では言い表せない「快感」が、「学ぶ」ことにはあるのです。

考えてみたら、子どもたちは毎日、なんの変哲もない日常を、楽しくて仕方ない生活へと「変化」させながら生きているのです。

社会も、自分の人生も、ついつい「変わらない」と思って諦めてしまいがちな私たちに、子どもたちはいっぱいいろんなことを教えてくれますね。

生きることをおもしろがる親であり、保育者であり、人間でありたいものですね。

山梨大学　加藤繁美

第１３／２１回　加藤　繁美　先生

第１４回　尾木　直樹　先生

子育て講演会が30回を迎えられたこと、おめでとうございます。すごいものですね。

口惜しい涙を流すことも含め日々の楽しい遊びが子どもの健康と発達の土台だと思います。徳山中央幼稚園の子どもたちが自分らしい人生の主人公として生き、発達していけるよう、今後ともスキルアップ保育実践を進めて下さい。

2013年5月
河崎道夫

第１６回　河崎　道夫　先生

お招きいただいた日の事を想い出しています。
園長さまの強い想いをよく理解し支えて
おられるスタッフの方々の様子もとても嬉しく
思います。育児や子育て支援等の問題が深刻化
する中、一貫して想いでこどもを育てておられる
貴園の取り組みは非常に貴重だと思います。
引続き宜しくお願いします。又お会いしましょう

中西 新太郎

子育て講演会三〇周年、おめでとうございます。
インターネット技術の発達は子どもたちの世界を
大きく変化させていますが、子どもが生きる場所は地域
です。地域の多様な人々の力に支えられることで
子どもたちが安心して生きられる場が築かれるのです。
東日本大震災の経験はそのことを痛いほどに教え
てくれました。徳山の地で子どもたちが普通に安
心してすごせる世界をつくり出す上で、子育て講演会
がつないできた人の絆はかけがえのないものだと思い
ます。今日のきびしい社会状況の中で、その希望の灯
をますます大きくされるよう願ってやみません。

第２６回　中西　新太郎　先生

第２７回　小西　行郎　先生

『子育て講演会』30周年おめでとうございます。
長きにわたり子育て講演会を通して、地域の子ども
たちを見守り続けてきた御手洗先生に、心から敬意
を表します。このような志の高い講演会で2年連続で
お話しさせていただきましたこと、たいへん光栄に
思っております。
私は今、「ことばキャンプ」というコミュニケーション
育成活動をしています。児童養護施設にも訪問し、
虐待で親と離れて暮らしている子どもたちと多く接し
ていますが、どんな仕打ちをされようとも親をかばい、
慕う健気な子どもたちを見ていて、子どもにとって
親は最愛の存在、子どもは親が大好き！なのだと
つくづく思います。どうか子どもに負けないくらい、
いっぱい愛してあげてほしい！
そして少しずつ「親ルールからじぶんルールへ」
自分で考え行動できるように、子どもを励ましながら
自立を促してあげてくださいね！
心豊かな子どもを育む徳山中央幼稚園の
ますますのご発展をお祈りしております。

ことばキャンプ
NPO法人 JAMネットワーク
高取しづか
http://www.takatori-shizuka.com/

第２８・２９回　高取しづか先生

「どの時代にも、どの民族も、共通に大事にしてきたものはなあーに？」

- こう聞かれたらみなさんはどう答えるでしょうか。人類がその歴史全体を通じて普遍的に大事にしてきたものは何かということです。その答えの内容こそが、「混沌とし始めている現代社会で、私たちがあらためて大事にしなければならないことは何か」という問いを考えるときのヒントを与えてくれるに違いありません。
- 答えはさまざまにあり得るでしょうが、私は、その一つは間違いなく宗教だと思っています。宗教こそ、どの民族も、どの時代でも、人々が大事にし、それを豊かにし、それをよりどころにして生きてきた当のものだと思うのです。形はさまざまですが、宗教のない社会はないのです。
- 御手洗賢成さんは、その宗教の担い手で、仏教のお坊さんです。
- 私は、仏教に限らず、宗教の自覚的ですぐれた担い手は、みな社会活動家だと思ってきました。釈迦にしても、イエスにしても、ムハンマッドにしても、あるいは日蓮や親鸞にしても、みな人々の幸せのために懸命に活動してきた人物です。人々、特に、権力や金力をもたない庶民の、現世・来世の幸せを願って、いのちを削って活動してきた人たちです。
- 御手洗賢成さんは、現代の日本で宗教家としての自らの使命を全うするために、幼児教育家となる道を選びました。宗教は人々に唯一平等に与えられた「いのち」の営みを助け、「いのち」が輝くように援助するものですが、幼児教育もまた、子どもたち一人一人に平等に与えられたそれぞれの「いのち」の営みを活性化し、充実するように援助する営みです。
- 御手洗賢成さんは、そのため、一方で幼稚園の園長として子どもたちと直接に関わり、遊びという子どもたちの「いのち」を直接輝かせる営みを充実させるために努力してきましたが、あわせて、その子どもを産み育てている当事者である保護者の、子育てというこれまた人類が普遍的に累々と続けてきた営みを、現代社会において充実させるための援助を累々と続けてこられました。
- その成果のひとつが、とうとう30回目を迎えた徳山中央幼稚園主催の「子育て講演会」です。
- 大したものだと思います。一言で30回といいますが、かくも長く続けることは並大抵のことではありません。みなさんのご家庭で30年間毎年続けているものはありますか？とといわれたら、返答に困るのではないでしょうか。
- その情熱は、御手洗賢成さんの宗教家=幼児教育家としての自覚がもたらしてくれたのだと思います。仏教寺院は、かつては、宗教的な儀式の場であるだけでなく、町や村の何でも相談所であり、祭りの拠点であり、学びや癒やしの場でした。町や村のいわば文化・教育・娯楽センターでした。その歴史的な寺院の機能を現代において引き継ぎたいとの願いが、「子育て講演会」として結実してきたのだと思います。講演会は、幼稚園を地域の子育てセンターとして機能させたいという宗教家御手洗賢成の願いの結実です。私は、こうした御手洗賢成さんの情熱に打たれて、これまでお手伝いさせてきましたが、光栄なことだと感謝しています。
- これから、徳山中央幼稚園は、どういう風に自らの使命を果たしていこうとするのか、私には強い興味があります。時代は一方で人口増問題、資源問題、環境問題など歴史にかつてなかった深刻な問題を一層深刻化させてしまう可能性があり、それとどう向き合うかが庶民の知恵として求められていますし、他方で、足下の問題としての深刻な少子高齢化社会の中で、孤独な高齢者を一人でもなくし、どの人も死ぬまで生き甲斐を持って生きることができる社会をどうつくるのかというような問題が蓄積してきます。高齢化社会問題を反転させますと育児困難問題になります。子どもがうんと少なくなるということは、子どもにとっては決してありがたいことではないのですが、地域の力を借りて子育てすることがきわめて困難になった現代社会では、子育て困難の最大の要因になります。
- そうした答えの簡単に見つからない問題群に囲まれるだろうこれからの社会だけれども、大丈夫、みんなでワイワイ知恵を出し合っていけば何とかなりますよ、私がそのワイワイの機会をつくりますし、場も提供します、相談にも応じます、みんなでががんばりましょう、というのが、御手洗賢成さんのスタンスではないかと推察しています。こういう人がいるから、社会は壊れないで、綿々と続いてきたのだと、あらためて思いを強くします。
- 御手洗園長は、きっとこうしたことも考えて、徳山中央幼稚園を、地域の、文字通り中核的な、お年寄りも集いあう、文化・教育・娯楽センターとして、発展させていくだろうと思っています。楽しみです。
- 頑張れ！賢成。応援しています。

- 第7回･12回･17回･18回･24回･25回･30回　東京大学名誉教授･白梅学園大学学長
-
- 汐見　稔幸

いじめとあそびの境目にあるもの

2013　3／6

園長　御手洗賢成

■ 最近、大津のいじめ自殺・大阪の体罰自殺・日本代表女子柔道の監督暴力など子どもや大人を取り巻くまたかと思わせる事案が表出しています。これは、幼児期には関係がないと見るには軽率ですが直結して考えるには短絡過ぎます。冷静に、思慮深く立ち止まって考えることが重要です。何故なら、この問題は今に始まったことではない長い伏線をもちつつなおざりにされてきた古くて新しい問題だからです。

■ 今回のいじめ自殺問題は、もう既に調査委員会の報告書が出ています。一番の注目すべき点は、いじめと自殺の因果関係を明確にしたということです。

　それは、80年代から引き起こされている一連のいじめ事件が、”あそびなのかいじめなのか”の境目が分かりづらいということで具体的調査を避け続けたことで、注目を浴びているのです。ここではっきりしておくべき第1は、『あそび』であれ『いじめ』であれ『いじり』、『冷やかし』『からかい』であっても、投げかける側の意識がどうであれ、その言動と行動が当事者にとって深刻な苦痛である場合は、いじめであると判断すべきだということであり、許されないことだということです。この点は、最終報告書も述べているところです。第2には、この『あそび的いじめ』には、他者の痛がる、困る、悲しむ、悩む姿を見てさらに追い込み且つ、それをゲームのように楽しむ感覚があるということです。これは、病理的なサディズムであり深刻な事態が蔓延していることをも示しています。記憶に新しい1997年の少年A（神戸の事件）の事件は、被害少年の首を切り落とし、その血を見て異常な性的興奮をおぼえたという報告が成されています。何がそうさせるのでしょうか。皆さん立ち止まって考えてみて下さい。

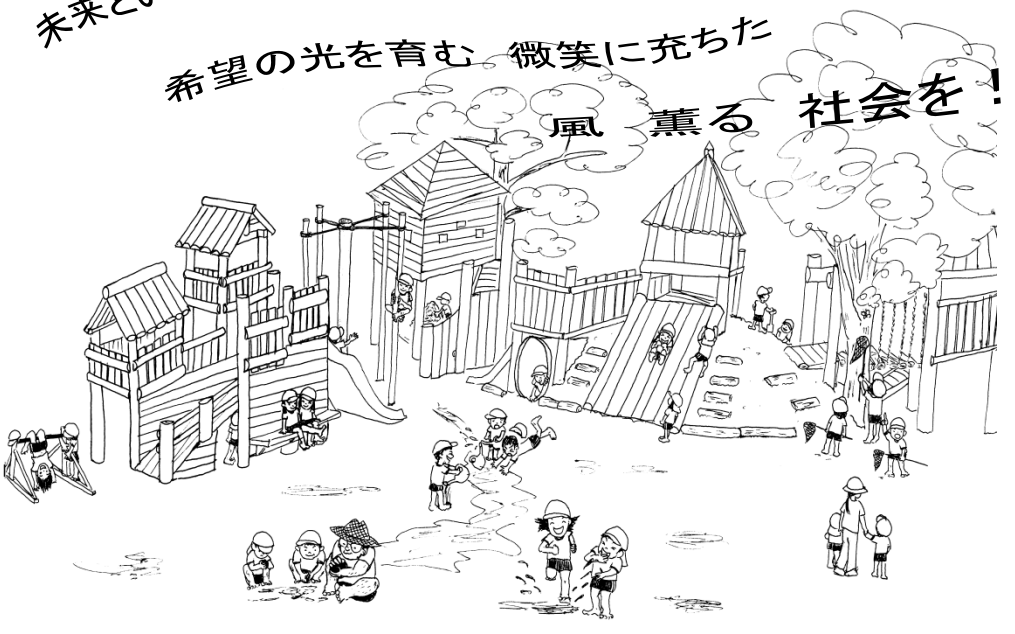
■ 下記に示した、対比はこの間の一連の事件の中にある境目論争の視点です。この中に、共通する１つ目は、力の強い方が弱い方に向かって、一方的『脅威』を行使するという構造だということです。2つ目は、セクハラの項目で見ると、行為をした側（肩を叩く）の思いは別にして、受けた側が左側だと感じる人と右側だと感じる人がいるということです。3つ目は、行為をした側には左側の意識はあまりなくあくまでも右側の意識しかない場合が多いという事実です。4つには、身体で行使する行為はえてして『言葉の喪失』を伴うということです。そこには、『何故そうなるのかを、指導する側も受ける側も考えるということを放棄する関係をよし』とし、尚且つそのことで相手が育つと錯覚する傲慢さしか残らないということです。人類の歴史は、相手を威嚇で支配する関係から抜け出そうとする模索の連続でした。しかしながら、地球上には自分の国に従わない人や国を、悪の枢軸と意味付け国連組織を形骸化しかねない大国のあることを忘れてはなりません。力で、相手をねじ伏せようとするいたらなさを常に孕みつつ生きている私であるという自覚に立ち、『対話的関係づくり』こそが未来を切り開く希望であるとの境界線に立ち、悩み生き抜く子どもを育みたいものです。対話的とは、力を用いずとも互いの違いのままに相互が主体として尊重され折り合いをつけられる関係です。

いじめ	か	あそびか
虐待	か	しつけか
体罰	か	指導か
暴力	か	愛の鞭か
セクハラ	か	スキンシップか
殺人	か	自己防衛か
戦争	か	抑止力か

未来という

希望の光を育む　微笑に充ちた

風　薫る　社会を！



活動なくして　発達なし

集団なくして　発達なし

教育なくして　発達なし

２０１３・６